

総合司会 河原徳子氏 「この士清縁の会場で地元の講師によって講座が持たれることは意義がある。」

経過説明と講師紹介 竹内令氏

「3年前からこの講座は始まっていて、前回は私が士清の三大業績として①『日本書紀通證』の完成
②『和語通音』図表の発明 ③『倭訓栞』の編集がある、と一般の方々を対象に話してきた。今回は多少
切り口を変えての講座にとの主催者の依頼で、講師も選手交代することになった。」

一 和訓栞から広辞苑へ (「あ」の部について)

馬場幸子

小学校で「士清さんは50音順の国語辞典のもと『和訓栞』を作った人ですよ」と講義しながらも、実際『大言海』への影響、それからの国語辞典とのかかわりを調べたわけではないので、講演の依頼を機会にこの三つを比較してみることにした。7・8月の暑い最中、自宅から広辞苑を持参し、旧宅へ連日通って展示ケースから『版本和訓栞』『増補語林和訓栞』『大言海』を出してもらって昼食も忘れて言葉を書き並べて見た。大言海に「和訓栞」と注釈がある言葉がある毎に『増補語林・』で調べ、『和訓栞』の前編・中編・後編と探していく。また、『増補語林・』で今も使われている言葉を抜き出して、『和訓栞』を探し、大言海、広辞苑を調べる。何しろ専門が数学である私には、古文を判読するのに時間がかかり亀の如くである。

面白い発見があった。それは大言海・広辞苑にない筆者(士清)の感想が『和訓栞』に見つかったことで、改めて感心したことは、ひらがな・漢字・言葉の説明のスタイルが既にこの『和訓栞』にあった事である。

士清はやはり偉大な国学者である。

他に調べて分かったことは、『和訓栞』のすべてが『増補語林・』には記述されておらず誤りもあるので、学生がこれに頼れば危険であるということ。また外来語についても『和訓栞』には既に地名・薬名を中心に多く掲載されているのに、大言海には外国の地名がほとんどないのは、辞典が時代を反映している証拠と思われる。

二 士清の家集『恵露草』を読み解く

佐野萬里子

この講座は、この歌集が士清の自筆の「家集」とであると発見したのは、明治41年10月末歌人の佐佐木信綱翁であるということから始めた。『谷川士清先生傳』(明治44年谷川士清先生顕彰会編纂)によると、「川喜田久太夫氏の蔵書数千巻を閲覧した時、その中に『恵露艸』と題した1冊の歌集があった。作者の名もない草稿本であるが、聞馴れぬ集の名であると思うて、よく見るに、士清の自筆で、識仁親王に入門して三年目に謁見したその前後五年間の詠草を集めた家集であった。まことに珍しいものである。(以下略)」

この歌集の冒頭部に『日本書紀通證』の完成と歌道入門の時期と事情が具体的に書かれていたのである。

「宝暦元年(1751)臘月(12月)に『日本書紀通證』35巻を脱稿した。その翌2年2月(数え年44歳)上洛し、有栖川宮識仁親王に寺本老岐守を介して歌道入門を願い出、4月山科法眼の紹介で5月11日に正式に入門を許され、御題をいただく」と。以後歌道に精進し、宝暦4年正月5日には寺本氏に従って参殿。謁見がかない、直接親王からお言葉と、御盃を賜り、短冊十枚を拝領している。それは「十体和歌」であった。御加点をいただいた歌を中心に毎月歌道を修練していった詠草をまとめたのがこの『恵露艸(草)』である。部立てはないが、大半は入門の時から下された御題に対する詠草が月ごとに順に並べられており、宝暦癸酉(1753)・甲戌(1754)正月など干支が時々入っていて、制作年次が推定できる。御添削を賜った歌を先行させ、傍らに自作が(私)として記載してあり、親王には入門の際に詠草と共に太刀馬の目録を献上したことも記載されている。

今回のレポートは、大半「谷川士清先生傳」に依ったが、末尾部分の42首には、それまでと異なる雰囲気があったので、川喜田久太夫氏蔵という自筆本を塚澤氏を介して石水会館で見せていただいた。そこで解ったことは、末尾部分には宮の御加点が無く、年代には入門以前の作/寛保壬戌(1742)や癸亥の年(1743)も見られ、更に享保壬子(1732)や延享2年(1745)・丁卯(1748)師走など京都での学友との交流や別れ、年号はないが弟の死を悼んでの水無月の歌や京都への往復に通った鈴鹿の山での歌、神宮に詣でた時の歌など、題詠を離れた詞書きが見られ、士清の行動や素顔が読みとれるものが多く、独自に口語訳を試みてみた。

弟の身まかり侍りてなきからを送るとて雨いとふ降りければ
ふらはふれさらてもかかはく袂かはうき身な月の夕暮の雨